

秋刀魚の歌

秋風とともに、秋刀魚が美味しい季節になった。当のサンマは、乱高下する価格でまだ私の口には入らない。小名浜に上がれば食べると決めているので、もう少し先のことになるかもしれない。

秋刀魚は、塩焼きがいい。しかし、脂の乗った刺身も美味である、アニキサスが怖いけれど。

秋刀魚と言えば、佐藤春夫の「秋刀魚の歌」である。

秋刀魚の歌 (佐藤 春夫)

あはれ
秋風よ
情(こころ) あらば伝えてよ
一 男ありて
今日の夕餉に ひとり
さんまを食ひて
思いにふける と。

さんま、さんま、
そが上に青き蜜柑の酸をしたたらせて
さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。
そのならひをあやしみなつかしみて女は
いくたびか青き蜜柑をもぎ来て夕餉にむかひけむ。
あはれ、人に捨てられんとする人妻と
妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、
愛うすき父を持ちし女の児は
小さき箸をあやつりなやみつつ
父ならぬ男にさんまの腸をくれむと言ふにあらずや。

あはれ
秋風よ
汝(なれ)こそは見つらめ
世のつねならぬかの団欒(まどい)を。
いかに

秋風よ
いとせめて
証（あかし）せよ かの一ときの団欒ゆめに非ずと。

あはれ
秋風よ
情（こころ）あらば伝えてよ、
夫を失はざりし妻と
父を失はざりし幼児とに伝えてよ
一 男ありて
今日の夕餉に ひとり
さんまを食ひて、
涙をながす、と。

さんま、さんま、
さんま苦いか塩っぱいか。
そが上に熱き涙をしたたらせて
さんまを食ふはいつこの里のならひぞや。
あはれ
げにそは問はまほしくをかし。

この「秋刀魚の歌」には、谷崎潤一郎と谷崎夫人千代と佐藤春夫の因縁が背景にあることは、あまりにも有名である。

谷崎夫人の千代を佐藤春夫に譲り渡した事件である。

潤一郎には、29歳の時に結婚した、当時のあるべき女性像として非の打ち所のない、美貌で貞淑の誉れ高い千代夫人がいた。周囲から、女の鑑、世の女性の理想像とまで言われていたが、ただでさえ女性遍歴の絶えなかった潤一郎は、何と千代の実の妹で、自由奔放な性格のせい子の方に恋焦がれ、本気で結婚を望んでいたのだった。

せい子は、谷崎の作品「痴人の愛」のヒロインのモデルとされている。

谷崎は、一般常識では考えられない、或る意味ではひどく破天荒で、異常なまでのな女性崇拜主義だったのか。そのことが、初めての結婚生活で早くも破綻の兆しを見せていたのか。

佐藤春夫と谷崎潤一郎の交際が始まったのは、この頃のことである。

千代夫人は潤一郎とせい子のことでも非常に悩んでいて、佐藤春夫に何かと相談を持ちかけていた。悩みを打ち明けられた春夫の千代への同情は、いつし

か情熱的な恋へと変わっていった。

この「秋刀魚の歌」を発表したとき、佐藤春夫29歳、谷崎千代24歳であった。「秋刀魚の歌」の背景には、こんな物語が隠されている。

あはれ
秋風よ
情（こころ）あらば伝えてよ
一 男ありて
今日の夕餉に ひとり
さんまを食ひて
思いにふける と。

さんま、さんま、
さんま苦いか塩っぱいか。
そが上に熱き涙をしたたらせて
さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。